ホテル前の佇まい。出発直前に撮影。

７．アルバナシ(Арбанаси)

タクシー

朝、目を覚まし窓際へ行ってカーテンをはぐり表の様子を窺う。雨は深夜に上がったらしく、曇り空ではあるが路面はほぼ乾いた状態になっていた。

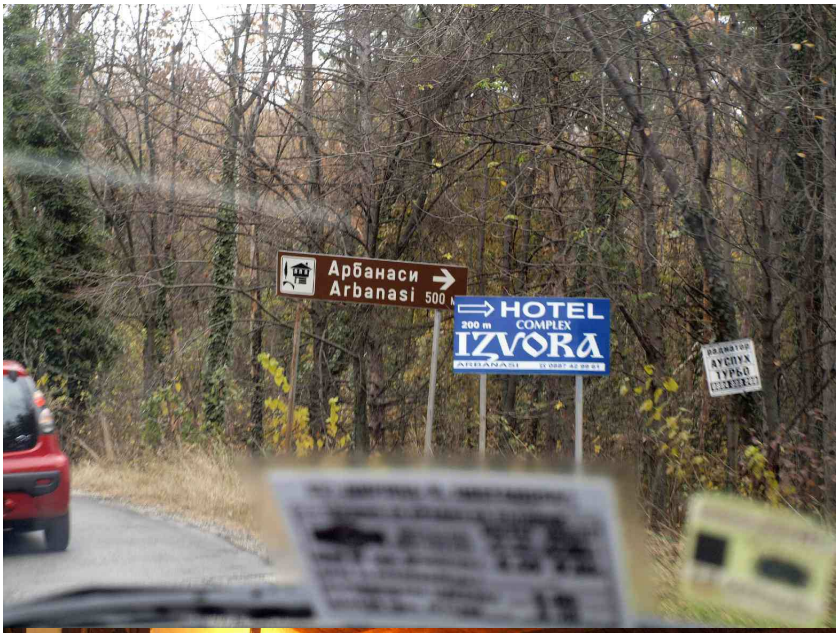
この日は移動してアルバナシへ行くつもりだ。この村は人口1,500の鄙びた聚落だが、ブルガリアの古き良き時代を偲ばせる場所として五本の指に必ず入るところらしい。宿の東北へ直線距離で2.6キロ、道路を辿っても4．2キロしかない。

歩いてでも行けそうなところなのに公共交通機関で行こうとすると面倒だ。英ガイドによれば、(3日前にヴァルナからの列車を乗り換えた)ゴルナ・オリャホヴィツァ鉄道駅へ行くミニバスが経由するらしい。しかしバス停は宿から2キロも離れているし、アルバナシまで乗り入れない便もあり、その場合は街道から700メートルの坂道を徒歩で登らなければならない。これがタクシーならば5Lv(275円)ぐらいで済むとも書いてある。

前日、フロントに依頼して宿泊予約はしてあるものの、早く着きすぎてもチェックインできないと困るので、11時まで部屋で読書し、ゆっくりチェックアウトする。三泊の料金はミニバーから取り出したミネラルウォーターの代金１．８Lv(９９円)を足して211.8Lv(11,632円)だった。カードは扱っていないので現金で支払う。

呼んで貰ったタクシーは5分待ちで到着する。軽自動車並みの小型だが、一人で乗る分には窮屈とも思わないし、短時間のドライブだから全く問題ない。

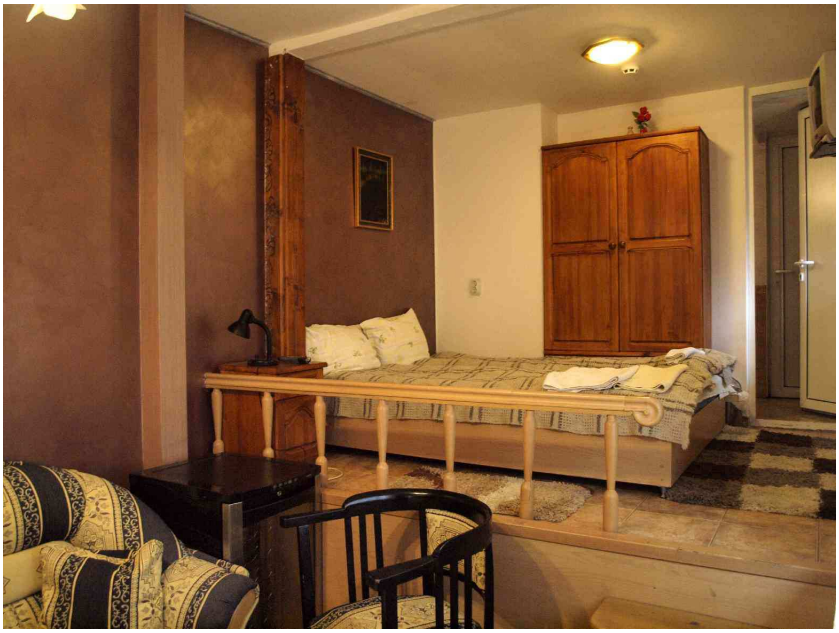
ゴルナ・オリャホヴィツァへの街道は、聖40人の殉教者教会の横を通過している。教会から5分ほどで枝道へ分岐し、坂を登る。沿道にはリゾート風の宿泊施設が目立った。坂を登り切り広場を横切ったところ



上：タクシー車内から。街道を離れて坂道を上り始めた辺り。
下：旅籠アルバートの食堂。薪暖炉が気持ち良く燃えていた。

で停車する。今宵の宿、旅籠アルバートの前だった。タクシーのメーターは3.9ぐらいだったと思う。5Lv(275円)渡し、「釣りはいらない。」と鷹揚に云う。一瞬のお大尽気分？ともかく安い。

アルバートに宿泊部分の玄関は特になく、まず食堂に入る。村人が食事するわけでもなく二、三人いた。たまり場になっているようだ。食堂の奥に小さなカウンターがあり食堂の勘定などと共にフロント業務もやっている。ともかく部屋を見せて貰った。



泊まった部屋。一段高い所にダブルベッド。その奥がトイレ、シャワー。手前の低い部分にソファーや応接テーブル、安楽椅子など。

裏口から一旦庭に出て、狭い木製の外階段で二階へ上がる。客室は二階部分だけで、三部屋ぐらいらしい。現代的ホテルとは雰囲気の異なる旅籠風の部屋は、いかにもアルバナシに相応しいような気がした。

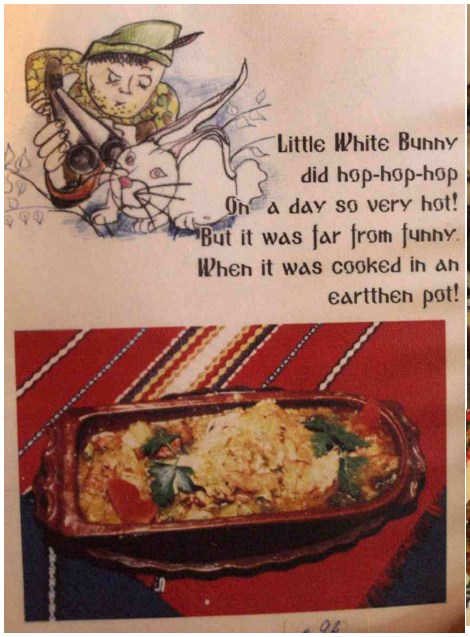
フロントに戻り、料金は後払いでよいとのことなので、鍵を受け取り荷物を収める。時計を見ると11時半だ。空腹感も今ひとつだったので、予備知識を持つ前に、村を一回りすることにした。

宿の前を道なりに西へ進んだ。車道はアスファルト舗装でも歩道は石畳だ。家々は漆喰壁か、一階部分が石積みだったりする。屋根は赤瓦だったのだろうか、今は色褪せて煉瓦色になっている。敷地を塀で囲っている家が多く、どの塀も赤瓦屋根付きで、築地塀の石積み版ということか。門も全て瓦屋根付きだった。

上左：装飾として積んである薪だろうか？。ヨーロッパの塀で屋根が葺いてあるのは珍しいと思うが、アルバナシの塀は全て屋根着き。

車や人の往来はほとんどない。村全体がひっそりと静まりかえっていた。手入れが良く磨き上げたような建物は、レストランなどの観光客相手の商売で、半分ぐらいはシーズンオフのためか休業中に見える。

村の佇まいは好ましいが、意外に狭く、5分も歩くと村外れというか築地塀などない領域になってしまう。これだけ狭いところならば迷子になる心配もないので、適当に枝道を歩んでみる。ほとんどが未舗装の砂利道だった。半時間強で、第一回のアルバナシ探訪を終わりにする。



左：お品書きは絵と写真入り、短文入りで凝った作りだ。右上：ショプスカサラダ。右下：兎のシチュー。

奥歯が割れた（その2）

宿に戻り食堂を通って部屋へ。多少混雑していたので食事は少し遅らせて1時からにした。

待った甲斐があり、混雑は解消していた。照明は暗くて、薪暖炉の炎が揺らめく様が強調される。いかにも旅籠の食堂で、寛いだ気分が心地良い。

凝った作りのお品書きは写真入りなので、異邦人には判りやすく有り難かった。ぱらぱらページを捲って、兎のシチューを見付け、迷わずこれにする。それとショプスカサラダ。ワインはシャルドネ（白）をフルボトルで。もたらされた壜を見ると pomorie と書いてある。ブルガスからネセバルへバス移動したとき見かけたリゾート地だが、ワイナリーもあるということか。

ショプスカサラダでワインを飲みながら、待つことおよそ20分。陶器製ポットに入れてオーブンで焼いたとおぼしきシチューが到来する。ウェイターは、「熱いので気をつけて！」と云いながらテーブルに置いてくれる。

オーブンで焼いたものと、電子レンジで加熱したものがどれほど味として違うのか不明だが、気分は全く違う。多分シチューの表面が若干焦げて味と香りに影響するのだろう。ともかく端の方から食べ始めた。美味かったのだと思う。しかしこのあとの事故により、記憶など吹き飛んでしまった。

食べ進めてゆくうちに、ガチッと音がして右の奥歯に激痛が走り、思わず涙がこぼれた。何が起きたのか良く理解できなかったが、固い異物を噛み締めてしまったことは確かだ。ともかくこれを口中から出して皿の端に置いたが、これが何だったのか確認することさえ忘れていた。

以下は後日談だ。翌日、国際電話で歯医者の予約を取り、帰国後すぐに受診した。20年ほどのお付き合いがある先生だが、痛む歯にちょっと触れて、「これは. . . .」で言葉を失った。間を置いて説明されたのは、真っ二つに割れているので抜く以外に治療法はないということだった。

あとから思い返せば、あの時に噛んでしまったのは、野兎を仕留めた散弾銃の弾だったのだろう。ちなみに散弾の材質は昔と異なり鉛ではなく鉄になっている。この鉄球を歯の真ん中ならまだ良かったのだろうが、片側で（無意識裏に）力一杯噛み締めたために歯が剪断したようだ。

さらに後日談。抜歯後にしばらくして、最終的にインプラントにできるか調べるためのCTスキャンをした。その結果、歯根の深い部分に割れた破片が残っており、これの除去手術を行った。しかしその後のCTスキャンでさらなる破片が見付かり、再手術が必要になる。それほどまで粉々になるとは、どれほどの力がかかったのだろうか。弾みの怖さか。

真っ二つに割れていた奥歯。

ヴェリコ・タルノヴォとアルバナシ間のバス時刻表 делничен が平日、празник が休日。

万屋の店内。

後日談が長くなってしまったが、這々の体ではあったものの食事は完食し、ワインも一本空にする。問題の歯に食物が触れれば激痛が走ったが、左側に寄せて食べれば、意外にも苦痛がほとんどなかったのだ。勘定はワイン26Lv(1,428円)、サラダ4.84Lv(266円)、兎シチュー8.92Lv(490円)。

部屋で午睡の後、4時半に散歩に出かけた。万屋でツマミの足しにサラミソーセージ(風)300グラム3.29Lv(181円)、カシューナッツ一袋1.95Lv(107円)を買う。

散歩をしながら放し飼いにされている犬と遊ぶ。首輪があるので飼い犬だろうか、毛並みは比較的綺麗だし、耳には避妊手術済み(?)のタグが付けられていた。

日本に置いてきた愛犬のことなどを思い出しながら遊んでいたが、こちらより先に、向こうが飽きたのか、他に興味を惹かれたのか、さっさと走り去ってしまった。

放し飼いのワンコ。

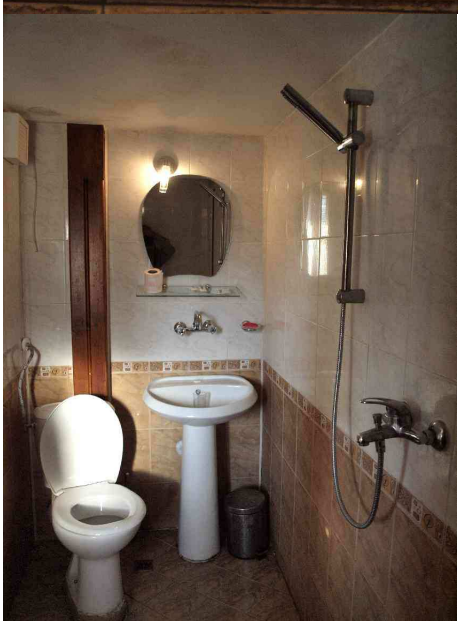
表から覗いた宿の食堂。執筆時にようやく気付いたが、無線LANが使用できると窓に表示されていた。

宿のすぐ隣が骨董屋で、店先には炭火を使用するアイロンなどが置かれている。もちろん実用にならないだろうが、どんな人が買うのだろうか。ともかく店内を覗いてみた。

店番は70過ぎのバアサン一人で、英語は通じない。古時計などは面白そうなものがあったが、それなりに高価だろうし、それ以上に持ち帰りが大変だ。そのまま立ち去るのも悪いような気がして安価なブローチを一つ買う。

宿の隣にあった骨董屋の店内。

サラミに貼られたラベルにはキロ単価が印字されている。



上：ヨーロッパの宿としては珍しくスリッパが用意されていた。下：トイレとシャワー。シャワーを使用すると床が水浸しになる。ブルガリア人は気にならないのか？

散歩から戻りシャワーを浴びる。シャワーブースどころかカーテンもないのでトイレ・シャワー室全体の床が水浸しになる。多少の勾配はあるから、ある程度は排水されるものの、ビショビショ状態は解消しない。

床用水切りワイパーみたいなものもなく、仕方ないから手や足である程度水を切り、バスタオルで拭くなどしなければ、トイレを使う度に足が濡れてしまう。ブルガリア人は室内でも靴を履いているから気にしないということなのか。

この日の晩酌はソファーに腰掛け、応接テーブルにささやかながらも酒肴を並べて楽しんだ。たまにこんなのも良いものだ。

夜になるとかなり外気温が下がり、室内も冷え込んできた。エアコンが設備されているが、運転音が大きく、短い間隔で断続するので余計耳障りだ。此処に限らずブルガリアの宿は、暖房という観点からすると実に低水準だと再び感じるのだった。

アルバナシ探訪

翌朝6時半に目を覚まし、夜明けを撮影しようと表へ出た。エアコンの排水部分には小さな氷柱が下がり、足許に滴った水は凍っているので滑りやすく、恐い思いをした。

8時を廻って朝食にする。泊まり客は他にいなかったが、食堂の薪暖炉はパチパチ音を立てて燃え、エアコンも効いているので暖かい。

昨日は見かけなかったオジサンが、手際よく支度をしてくれる。飲み物を訊かれたのでミルクコーヒーを所望。これと一緒に生ハム、トマト、サラミ、オリーブの実、チーズ、ハムエッグの盛られた皿とパンが出された。この一皿で既にブルガリアで摂った朝食として最充実メニューなのに、加えて足つきグラスに入った蜂蜜と苺ジャムも供される。

とても全部は食べきれないと思っていたのに、チーズ2種類を載せた皿と、ネクター系の濃厚な味のするジュースまで食卓に並ぶ。彼はこの給仕を終えると、エプロンを外し、コートを着るとショルダーバッグを肩に掛け出勤していった。本業は違うらしい。

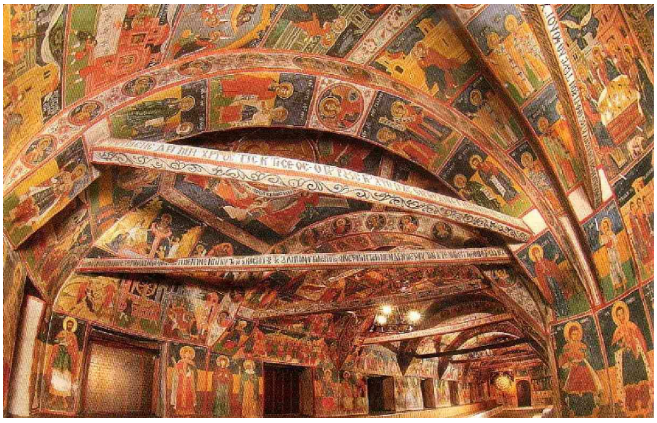
時間をかけて頑張ったが、これをついに食べきれなかった。しかし今回の旅で一番印象に残る朝食だ。

上：朝食の生ハム、トマト、サラミ、オリーブの実、チーズ、ハムエッグ。中：蜂蜜と苺ジャム。下：チーズ2種類とネクター系の飲み物。

17世紀創建のキリスト生誕教会。オスマントルコ時代に建てられた教会は概ね背が低い。

当初は二泊するつもりでいたが、昨日しばらく歩き廻って気が変わった。雰囲気の良いところではあるが、あまりに観光地的だし、それでいて地域的には狭いところなのですぐに飽きてしまったのだ。しかし移動を決めてしまうと、出発までの時間を利用してもう少し見ておきたいとの思いが湧き上がる。

9時に宿を出て、ほとんど人通りのない路地を彷徨った。主な観光スポットである教会や民家は10時に開場するようだ。しかし気持ち良く晴、気温3℃ではあったが風のない朝の散歩は快適だった。



キリスト生誕教会の壁画全景。インターネットから採取。

1時間ほど歩いて一旦宿へ戻り、暖かい食堂でミルクコーヒーを飲んで寒さに強ばった身体をほぐす。再度出かけてまずキリスト生誕教会を訪ねた。質素な外観だけれど、その内部には至る所に壁画が描かれ、日ガイドによれば、「聖書の二千の場面、三千二百六十人もの聖人が描かれ」ているそうだ。

教会敷地内にブースがあり、此処で入場料6Lv(330円)を支払う。撮影は一切禁止だった。教会に入ると、切符売り場から出てきたオバサンがパチパチと電灯を点してくれる。

壁や天井にほとんど隙間なく描かれた壁画は、そのボリュームで凄いといえるかもしれないが、この手の絵画は好みではないし、筆致もラフな感じがして、「質より量か？」と思ってしまう。しかし考えてみればオスマントルコ支配下で、キリスト教徒には権力も財力なかっただろう。ひたすら信仰への思いと神に対する奉仕の念を爆発させて描いたのだろうか。

そんな風に眺めれば、情念の凄まじさは感じられる。その一方、技巧や計画性などとは無縁の世界だったのか。

しばらく後から入ってきた若いカップルも、あまり感心する様子もなく立ち去っていった。こちらも15分ほどで見物を終わりにする。

「人生の輪」と呼ばれている壁画。同上。

上左：外観。防犯の観点から1階部分に窓はほとんどない。上右：居間。
下左：厨房。下右：居間。左側の白い塊はストーブらしい。

スルタン・スレイマン一世は、アルバナシを1538年に義理の息子で宰相を務めていたルステム・パシャへ寄贈した。ルステムは近隣の峠管理を条件に様々な税制上の特権を村に対して与えたため、多くの豪商がこの地に育つ。

豪商達の屋敷は保存状態の良いものが多く、国の文化財として指定されているものが36軒あり、その中でもとりわけ立派なのがコンスタンツァリエフ・ハウスだ。

コンスタンツァリエフはトルコ人豪商で、この一族からはヴェリコ・タルノヴォのオスマン総督に嫁いだ者もいる。元々は17世紀に建築された建物を、18世紀末に民族復興期様式で改築したらしい。

一階は防犯のため窓がほとんどなく、倉庫などに使用されていた。現在は土産物屋などになり、二階が往時のトルコ人富裕層が生活していた情景を垣間見せてくれる。入場料は4Lv(220円)だったかと思うが、記録も切符も残っていない。別途撮影料も支払ったような曖昧な記憶もある。

コンスタンツァリエフ・ハウスを出て、天気も良いし、先を急ぐ必要もないため、村の散策を続けた。昨日の曇り空と印象が大幅に異なり、魅力的なところだと思う。だからといってもう一泊とまでとはならなかったが。

1時間ばかり歩き廻った後に、旅籠アルバートへ戻り、荷物を部屋から出す。食堂で1泊45Lv(2,471円)の勘定を済ませる。次いでタクシーを呼んで貰った。

上：コンスタンツァリエフ・ハウスの庭にいた犬。気立てのよい子だった。
下：村外れで見かけた家。塀が面白かった。赤い文字で記載されているのは「ゲスト・ハウス」だろうか？